



表紙 牧馬図屏風 長谷川信春筆
解説は17ページ参照
題字デザイン・桑山弥三郎
カット・林美紀子

もくじ

年頭に当たって……………犬丸 直……4

地方文化運動の中で……………荒木精之……6

歌舞伎・文楽・竹本の伝承者養成……………佐藤鉄彌……10

カルコン・交流美術展における
美術品のケアに関する会議……………倉田文作……13

アジア・太平洋地域
著作権隣接権セミナーに参加して……………田原昭之……16

文化庁ニュース
重要文化財建造物の新指定……………18
第24回文化財防火デー……………19
昭和52年度文化財愛護活動全国研究集会開く……………20
文化財指導者講習会開かる……………21
昭和52年度都道府県
文化財保護指導委員研修会の開催……………21
地方文化活動リーダー研修会の開催……………22

〔紹介〕
フランスの新国語施策……………前田陽一……23
タイの文学……………岩城雄次郎……25

文化財保護法教室（14）
埋蔵文化財（II）……………28

我が県の文化行政
未来をひらく文化の振興をめざして——山口県——
……………河野良輔……31

美術館・博物館・文化施設めぐり⑧
浮世絵のリッカー美術館……………34

国立劇場ニュース……………35

カルコン・交流美術展における

美術品のケアに関する会議



倉田 文作

(奈良国立博物館長)

一 この小委員会のなりたち

カルコンといっても、略称だからご存知の方が少ないかも知れない。正しくは「U.S.-Japan Conference on Cultural and Educational Interchange」略して「CULCON」という。日米文化教育会議と訳されている。日米両国間の文化・教育面の学識経験者が隔年に日・米どちらかを会場に集まって、両国間の文化教育交流の諸問題について高度の、しかもきたんのない意見をたたかわす場であり、会議のさいはいろいろの分科会や小委員会に分かれて具体的な討論が行われるが、第七回のカルコン会議では、美術品を交流するさいの基本的な方針や古い文化財の保存と取扱いに関するスタディグループ、つまり専門家による小委員会の設立が勧告された。この第七回のカルコン会議では、両国間の美術

展の交流が大きなテーマのひとつであって、特にアメリカの建国二百年を記念して、同国内の多くの美術館、博物館を結んでそれらの協力による世界名作展を日本に送ろうとする計画がこのさいはじめて公表された。これは従来日本美術の大きな展覧が何度も組織されてアメリカの各地を巡回し、日米間の文化交流に大きく貢献している実績をアメリカ側が高く評価し、そのいわば返礼の意味あいでもアメリカの多くの博物館・美術館のコレクションの総合展を組織しようとするなかなか野心的な試みであった（因みにこの特別展はアメリカの五〇館ほどの参加をえて一九七六年東京・京都で開催され、大きな反響をよんだ）。

こうして両国間の美術品の交流が促進されるに当たって、当然のことながら美術品の保存・取扱いの基本的な条件のちがいが大きな問題と

なる。特に、西欧の油彩や石造彫刻、金工品などに比べて、絹、紙、木材などを主な素材とし、材質、形状などのすべての面で長時間の展示に耐えぬものが多い日本の美術品の場合は、その取扱い、梱包、輸送、展示、照明のあらゆる面で特別の注意がはらわれねばならないし、特に年間を通じて比較的湿度の高い日本から、相對湿度の低いアメリカに美術品を送るさいには、あちらでの会場の展示条件、特に日本のそれに近い湿度の維持が必須の条件になる。温湿度の急変によって影響をうけやすい木彫や漆芸、屏風や襖などが展示される場合はなおのことであり、しかも東洋の美術品は、その扱いに熟練した専門家の手を煩わさないと不測の事故を起こしやすい。一方アメリカから日本に送られる美術品にしても、同様に保存条件の変化によって影響を受ける危険性を伴う。

このような展示会場における温湿度調整や照明にさいしての照度の調整や紫外線の防除などの配慮は、国内においても当然必要不可欠のものであって、古い文化財のなかには材質からして移動すること自体を避けねばならない塑像その他の美術品もあり、またたとえば高野山のような年間を通じて湿度の高いところから文化財を他の場所に移動するさいには当然適切な温湿度調整が必要になる。われわれも、過去のアメリカにおける日本古美術品の巡回展などに随行したさいは、特に冬期暖房下のアメリカ会場が、

時としてかなりの低湿度になりうることにしばしばびっくりさせられ、その対策として会場内に加湿器を持ちこんだり、また温度を調整するなど苦心をした経験がある。エア・タイトにして湿度調整を行った日本からの梱包を解くさいでも、一度に解梱することは避けて、解梱場所の湿度を整えながら、時間を十分にかけ、時としては数日かかって解梱する例も珍しくはなかった。このように両国間に目立った気象条件のちがいが認められる以上、そして特に日本からの展示品がいつもデリケートな取扱いを必要とする以上、こうした交流にさいしてのハンドリングとケアを討議するための専門家会議の開催が要望され、実現したのはまことに適切なことであつた。

この専門家会議は、博物館交流小委員会のなかの「巡回美術展における美術品のケアに関するスタディ・グループ」として発足し、その第一回の会合は一九七五年の夏、ワシントン（D.C.）のフリア・ギャラリイで開催された。このスタディ・グループのテーマである美術品のケアとは、美術品の交流・展示にさいしての保存科学的配慮ばかりでなく、その選択、輸送梱包、展示方法などの実際面までをひろく研究・討議するたてまえになつていたので、いささか翻訳しにくい。ここではケアという原語をそのままに紹介することにしたい。このワシントンでの討議には、アメリカ側からはフリアのスターン

館長、クリーヴランド美術館のリー館長をはじめ、保存・修理に携わる科学者、修理技術者中に在米中の日本人修理技術者、装演師としてのフリアの杉浦、三日月、メトロポリタン美術館の阿部、彫刻修理のメトロポリタン美術館辻本の諸氏も参加している。日本からは東京国立文化財研究所の登石前保存科学部長、西川修復技術部長、文化庁の鷲塚技官など、両国あわせて二十一名の出席者が討議に参加し、その結果を基礎としてスタディ・グループの報告案が起草された。この報告案はその後両国の専門家の間でさらに検討され、修正を経て、本年の二回目の会議で再検討される運びとなつたものである。

二 本年の第二回会議について

「巡回美術展における美術品のケアに関するスタディ・グループ」の第二回会議は、本年十一月七日から九日の間、外務省六階の国際会議場で開催された。アメリカ側出席者は、ニューヨークのジャパン・ハウス・ギャラリイ館長ランド・カステイル、クリーヴランド美術館長シャーマン・リー両氏のほか、フリア・ギャラリイの主任コンサーバターのW・T・チェイス、カーネギー・メロン・インスティテュートのロバート・L・フェラー博士、フリア・ギャラリイのジョン・ウインター博士、同じくフリアの装演師杉浦崇の諸氏、日本側は文化庁の吉久次長、伊藤文化財鑑査官のほか外務省、文部省、交流

基金の代表者、ならびに博物館、美術館等の専門家計二〇名が参加した。登石前東文研保存科学部長は、今回も引続き参加の上研究発表者のパネルに加わつた。

会議は七日の午前に開かれ、冒頭に吉久文文化庁次長の歓迎の挨拶があつたが、前回の会議の当番館長であり、加えてカルコンの文化財交流・保存の討議にさいして常に積極的な役割を果たしてきた前フリア・ギャラリイ館長ハロルド・P・スターン博士の急逝に対する哀悼の辞が述べられたのはまことに印象的であつた。今回の会議では、スタディ・グループのカルコンに対する最終報告案のとりまとめのための討論と同時に、その内容に密接な関連をもつ保存科学、行政、梱包輸送の実際面等に関する参加者中九名の発表が行われたので、そのタイトルを紹介しておく。

- (1) 交流展にさいしての出品物の生物被害とその除去（フリア・ギャラリイ、ウインター博士）
- (2) 日本における生物被害に対する予防処置（東文研、江本保存科学部長）
- (3) 西欧美術品の特質と保存の要件（フリア・ギャラリイ、チェイス氏）
- (4) 美術品の諸種材質とそれらの強度（第一回会議に提出された西欧の材質強度に関するスタウト表に対比して）（登石前東文研保存科学部長）

- (5) 美術品に及ぼす照明の影響（カーネギー・メロン・インスティテュート、フェラー博士）
 - (6) 交流展出品物梱包の材料と方法（西川東文研修復技術部長）
 - (7) 同前（ジャパン・ハウス・ギャラリイ、カステイル館長）
 - (8) 交流展の歴史と反省（クリーヴランド美術館、リー館長）
 - (9) 文化財の公開制限（浜田文化美術工芸課長）
- 以上の発表は、それぞれに具体的であり、お互いに当面する保存と活用の諸問題についてあるいは保存科学の面から、あるいは保存の立場から、または、行政の面からの問題点の指摘と当面の解決策を示唆したもので、各報告に就いての質疑応答もみりのあるものであり、傾聴すべき点が多かつた。

これらの発表をそれぞれに裏づけとして、九日の最終日にはいよいよスタディ・グループとしての最終報告案のとりまとめが行われ、その各章、各パラグラフごとに率直な意見表明があつて、かなりの修正の上、グループとしての採択が決定された。

この最終報告案は、カルコン本会議に送られ、その採択を経た上でいづれ公表されるものと考えられるが、その主眼点を若干ここに紹介しておくことにする。

この報告案で特に印象的なのは、その前文な

らびに総論において、いかなる交流展の組織にさいしても、美術品の完全なる保存と次代への継承が、活用に先行すべきわれわれの当面の責任であり、したがって、貴重な文化財が政治目的その他の理由で軽々しく梱包、輸送されるべきではないことを明記していることで、これは文化財の保存、管理に携わる関係者の良心の声を伝えるものといえよう。交流展示のためのスタディ・グループが、まず目的の明確でない交流の企画に歯だめをかけたことは注目していい。

この報告案はだいたい前文、第一章総論、第二章日本美術品の特質、第三章西欧美術品の特質、第四章材質と強度、第五章梱包、輸送と点検、第六章展示、第七章結論の七章からなり、それにこの報告案の用語の定義、チェック・リストの見本、第一、二回スタディグループの出席者リスト、ヒアリングファイなどがアペンデックスとして附属しているが、それらの各章を通じて印象的なのは、それらの記述がさくさく具体的、実務的であることで、一、二の例をあげると第四章の材質と強度の解説では従来西欧の美術館関係者の間の一典拠となつていたジョージ・スタウトの材質別強度表に、今回登石博士の日本美術の材質別強度表が加わり、材質の面では紙、絹、墨、顔料、膠、漆、木材、プロンズ、鉄、石、糊などのそれぞれについて各種

光線、乾湿、湿度の急変、露出、カビ、虫蝕、外力等の強度が五段階に分けて記されているし、

また、作品の種類としては染色、版画、板絵、画軸、屏風・襖、一木彫像、寄木彫像、木心乾漆、脱活乾漆、塑像、彩色像、漆芸、陶磁器、刀剣、鍔、金工などの細目の光、温湿度、虫蝕害等に対する強度が一覧表として掲げられているのは、特に西欧の関係者のよき参考となるであろう。輸送、梱包についても、この報告案は事前の点検とチェックリストの作製、記録撮影の励行、梱包材料の選定と保存、解梱にさいしてのアクラマタイゼーション（温湿度条件の調整）など、きわめて具体的に守るべき諸条件を提案している。また従来から一種の懸案となつていたアメリカにおける日本美術品展示のさいの会場湿度の調整は、今回二二度Cを温度の上限とし、相対湿度を六〇±五パーセントとすることがガイドラインとして提案されている。

今回の会議を通じて印象的であつたのは、両国の専門家を通じて美術展交流の意義と重要性を十分に認識し、その促進を提言しながらも、一方では当該文化財の保存と安全を重視して展示物の選定に当たつての限界を明示しようとしていること、つまり保存をあくまで第一の要件として、その上で交流、展示の活用面を工夫しようとしている事実で、これは経年の結果脆弱化した文化財の活用を考える場合の良心的なアプローチといつていい。三日間を通じて両国の専門家たちが、腹藏なく、率直な意見交換を行つた会場の空気は、こころよいものであつた。

編集後記

○明けましておめでとございます。本年もどうぞよろしくお願い致します。昭和五十三年は文化庁設立後十年目に当たる。この間に著作権法や文化財保護法の改正、モナ・リザ展の開催、高松塚古墳の発見、国立国際美術館の開館など大きな出来事も多かった。

新しい年は、過去十年間を振り返るとともに次の十年への展望を開く年として、新たな気持ちで文化行政を進める必要がある。

○本号は新年号でもあるので、通常より四ページ増とした。大丸長官の年頭の所感や荒木精之氏の地方文化の振興についての考え方など文化行政の基本にふれる読み物を掲載している。(K)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 ぎょうせい 営業課
TEL(0)三(二六八)二二四二(代表)

「文化庁月報」 一月号

(通巻第一二二号)
昭和53年1月25日印刷・発行

編集文化庁

〒100 東京都千代田区霞が関3丁目2番2号
発行所 株式会社 ぎょうせい

本社 千代田区中央区銀座7丁目4番12号
営業所 千代田区新富区西五軒町52番地
電話(0)三(二六八)二二四二(代表)

振替口座 東京 九一六一番
印刷所 協行政学会印刷所

定価・一五〇円(送料二九円)
年間購読料 一、八〇〇円